

「力石ちからいし」とは、「労働を人力に頼らざるを得なかった時代に労働者の間に発生し、力比べや体力を養うのを目的にした石を指す」(『千葉の力石』高島慎助著)とされます。つまり、力試しに用いられた大きな石のことをいいます。

川辺(栄地区)十二所神社で見つかった3個の



力石が境内にまとめて整備、保存されたと神社関係者から知らされました。2基の石の鳥居をくぐり参道を進むと、右側に案内板と力石があり、いずれも卵型で重さは約70〜85キロほどです。

案内板によると、十二所神社の創建は不詳とされるものの765年に京都・賀茂神社の末社としてまつられたのち、1248年紀州(現在の和歌山県)熊野十二所大明神を合わせまつたとされます。

そして下総国匝瑳南条荘飯倉郷堀川村(川辺、蕪里、堀川小屋、栢田4カ村)の総鎮守であったとされます。

市内の力石は、小高(飯

高地区)八坂神社境内の1827年に奉納された25貫目(約94キログラム)のものが知られています。「力石による力持ちが盛んであった幕末から明治にかけての年代刻字も多く見られた」(『千葉の力石』)とされます。

2006年に刊行された『千葉の力石』には、代用されたものを含め、市内では5個(十二所神社のものは未掲載)記載されていますが、当時は八坂神社のものを含め、いずれもが所在不明とされていました。その後、八坂神社へは返還されましたが、移動可能なものだけに保存が難しいこともありませう。

今回、十二所神社の力石は、しっかりと固定され保存対策が取られました。それらを見ると、かつて若者たちが力比べをしにぎわった境内の様子が浮かんできます。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問秘書課広報聴班

☎73・0080